様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３２６１７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２３５０

研究課題名（和文）アイルランド旅行記・小説・図像のインターアクション―1780年から1864年

研究課題名（英文）Interactions between Textual and Visual Representations in Irish Fiction and Travel Books about Ireland, 1780-1864

研究代表者
中村　哲子（Nakamura, Tetsuko）

駒澤大学・総合教育研究部・教授

研究者番号：２０２３７４１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、イギリス人を中心としたアイルランド旅行者の手になる旅行記とアイルランド小説の影響関係について、1780年から1864年の時期に焦点を合わせて解明するものとなった。旅行記では、旅行者の訪れる場所や地域に共通性が見られ、テキストの反復や改変、また、過去の旅行記からの引用が盛り込まれるという特徴が見られる。そうした一定の枠組みを持つ旅行記を意識してメッセージ性を持った小説が書かれたり、また、小説で舞台となった地域へ旅行者が訪れ、旅行記が書かれたりもする。そこには、挿絵も絡み、ある特定のイメージの構築と反復とともに、差異による新たな世界の想像も展開されるのである。

研究成果の概要（英文）：　This research focuses on the interactions between Irish fiction and travel books on Ireland published between 1780 and 1864, by examining the material realities of travel in the period in the context of the real and imagined geographies of Irish fiction. One unique aspect of this research is its analysis not only of how travel books influenced the descriptions of travel, scenery and people in prose fiction, but also the reverse: how fiction influenced travel writing. The research also looks at the repeated use of the same or similar illustrations in travel books and works of fiction, and at how the circulation of particular visual images gave readers fixed impressions of Ireland and its people. My focus on the interaction between textual and visual discourses in fiction and non-fiction contributes to the opening up of a new field of literary, cultural and historical interpretation and appreciation of Ireland.

研究分野：アイルランド文学文化

キーワード：アイルランド　旅行記　小説　挿絵　18世紀　19世紀

１．研究開始当初の背景

(1) 旅行記研究一般が高まりを見せる中、多くのアイルランドをめぐる旅行記のありようについても学術的な解明が進んできていた。また、アイルランド旅行を物語の基本的な枠組みとするアイルランド小説についても、旅行記との関連性に注目した研究が展開されるようになっていた。しかし、具体的な両者の接点や相互関係については、さらなる研究の余地が十分にあると判断された。

(2) 一般に旅行記や旅行ガイドには視覚図像がつきものだが、アイルランドをめぐる地理・地誌関連書、旅行ガイド、旅行記については、18 世紀後半から 19 世紀半ばへと、その添付図像のありように興味深い変化が見られると認識していた。その中で、特定の観光地、また、アイルランドに特徴的な事物の挿絵に注目することで、旅行記と小説の接点への解釈が深まると判断された。

２．研究の目的

(1) 18 世紀後半に向けて、アイルランドへの関心が高まるにつれ、イギリス人を中心としたアイルランド旅行者が増加し、旅行ガイドや地理・地誌関連書も出版されるようになる。それにともなうかのようにアイルランドを舞台とする小説も登場し始める。こうした小説の登場を後追いするかのように、アイルランド旅行記の語りのありようも変化していく。そこで、小説、旅行記、旅行ガイドといったジャンルの流動性を具体的に明確にするとともに、アイルランドをめぐる旅にかかわるテクストの接点や相互関係を解き明かすことを目的とした。アイルランドを語るモードをとらえる研究に資すると考えた。

(2) イギリス人を中心としたアイルランド旅行者が生み出す旅行記、そして、アイルランド在住の作家たちが発信する小説も、その主たる読者をイギリス本国に求めている。アイルランドが正式にイギリスに併合されたのは 1800 年成立の合同法によるものの、16 世紀から続く支配者側のイギリスと支配される側のアイルランドがアイルランドにいかなる視線を向けるかには差異がある。立場の異なる両者が描き出すアイルランドのありようについて、テクストおよび図像からその複数性や影響関係を解明することとした。

３．研究の方法

概要は次の七段階となる。①研究に必要とされる第一次資料および研究書などの第二次資料の収集と保存、②第一次資料の読解と分析、③第二次資料を活用しての第一次資料の検証、④考察のまとめ、⑤助言などの提供を受ける、⑥成果の一部を発表する、⑦再考察を行う。

具体的には以下のとおりである。

①について：a) 次の機関の所蔵文献あるいはデータベースの活用――駒澤大学・慶應義塾大学・東京大学・アイルランド国立図書館・英国図書館・ボドリー図書館・合衆国議会図書館　b) 流通する第一次資料の一部を購入

⑤について：次の学会参加による――日本英文学会、IASIL Japan、日本アイルランド協会、International Network of Irish Famine Studies、Eighteenth Century Literature Research Network of Ireland

４．研究成果

本研究では、一般的に異なるジャンルと目される旅行記（実際の旅行経験を語るナラティヴ）と小説（フィクションとしての旅と訪問先の提示）の境界が明確ではない点を具体的に指摘した。一つには、18 世紀後半に徐々に増加するアイルランド旅行記、旅行ガイド、地誌などのテクストには、同じテクストの反復、また、ある特定のテクストを基盤として改変されたテクストの使用が見られる。つまり、実際に旅行をしなくとも旅行記として刊行されたと目される出版物が存在するのである。また、青少年の教育目的で、旅行記として書き下ろされた読み物もある。

初期の旅行記として影響力のあったものに、ジョン・ブッシュ著『アイルランド珍書』(*Hibernia Curiosa*, 1764) があるが、このテクストはさまざまに活用され、代表的にはフィリップ・ラッカム編『アイルランド旅行』(*A Tour through Ireland*, 1780) において採録が明記されないまま、テクストの借用がなされている。ラッカムが実際に旅をしたとは考えにくい出版物となっている。18 世紀半ばのブッシュのテクストが、19 世紀初頭の旅行ガイドにまで活用され、その特定の描写が、世紀をまたいで詩や小説にも盛り込まれている。過去の情報がそのまま流通し、現実とは乖離した内容がフィクションとノンフィクションの旅の語りに入り込んでいる。

類似の例は、19 世紀のアイルランド旅行記として重要な位置を占めるホール夫妻著の三巻本、『アイルランド』(*Ireland: Its Scenery, Character &c.*, 1841-43) の周辺にも見て取れる。1840 年代後半のジャガイモ飢饉をまたいで、ホール夫妻は現状に合わせて飢饉前のテクストを改訂し、さまざまな出版形態で旅行記を刊行している。しかし、そこには、19 世紀前半に書かれたテクストも紛れ込んでいる。また、上記三巻本には大量の挿絵が含まれているが、その図像は繰り返し異なる刊行物において使用されていく。ここでは、出版費用とのかかわりも重要な要因と考えられる。

実際、19 世紀初頭、併合後の新たなアイルランドをめぐる旅を描いた二点の旅行記は、大きな図版を含めた高額な刊行物として諸雑誌の書評で取り上げられる。ジョン・カー著『アイルランドへの来訪者』(*The Stranger in Ireland*, 1806) とアイザック・ウェルド著『キラーニーとその周辺の景観について』

(*Illustrations of the Scenery of Killarney and the Surrounding Countries*, 1807) である。両者では、当時のモダンな都市空間の風景、あるいは、風光明媚な自然の景観が示され、それ以降、1820 年代をとおして、風景が挿絵の主たる題材となっていく流れの先駆けとなっている。旅行記における風景図像は、18 世紀末に向けてジョナサン・フィッシャーやジェイムズ・マルトンが絵画として制作し、その版画が広く流布するようになったことに影響を受けたと言える。

19 世紀初頭に立て続けに刊行された旅行記には、旅行記作家と呼べる物書きによるものが散見されるが、個人的な旅行体験を語るナラティヴの形が定着するまでには、1810 年代から 1820 年代にさまざまなスタイルの語りによる模索があったと言える。この時期に、イギリスとアイルランドの間を行き来する枠組みに支えられた小説が多く書かれている。旅行記については、1830 年代以降、過去の旅行記を参考としながら自らの旅の経験を個人的な語りとして提示するモードが明確化する。その流れは、大飢饉旅行記とも呼べる飢饉の惨事を時に感傷的に伝える語りのモードにつながっていくことにもなる。

大飢饉の実態は、旅の語りとして、また、報告書に近い語りとして図像とともに流布するが、小説においては、その提示に一定の抑制がかけられ、読み物としての工夫が施される。飢饉後、記憶として飢饉をフィクションに取り込む方策が模索されるが、旅行記などでの語りを意識しつつ、作品全体としてのメッセージ性に配慮し、時代設定をずらすなど、直接的にジャガイモ飢饉を描くことへの躊躇が見られる。

旅行記と小説における視線の複数性については、イギリスからの旅行者が往々にしてイギリスを基準にとしてアイルランドでの経験を比較しながら語り、植民地主義的な視線を提示する傾向にある。以下、具体的な点について個別に示す。

A) 都市ダブリンをめぐって

18 世紀後半にダブリンの整備が進み、後にアイルランド銀行となる議会議事堂、カスタム・ハウス、フォーコーツなどのモダンな建築物とその都市空間への賛辞は、ダブリン港からアイルランドに上陸する多くの旅行者の指摘する点である。期待を超える都市の様相を目の前にして、ロンドン以上との驚きを示すとともに、ダブリン港周辺の整備の遅れや市街までの利便性、アイルランド人の御者の対応などについて批判的な言及がなされる傾向にある。

アイルランド小説では、旅行者として、あるいは祖国に帰還するアイルランド人としてダブリン港に入る設定が見られるが、旅行記での定番の枠組みを逸脱する描写を展開することにより、それぞれの登場人物の性格や役割に意味を付加している。

そのほか、アイルランドの地方からダブリンへ出向き、ダブリンを経験する小説も書かれている。こうした作品では、都市ダブリンがさまざまな機会を提供する飛躍のためのスペースとして描かれるとともに、個人を抹殺し貧困と犯罪の巣くうスペースとしても提示される。ここには、作家の立場（その背景がプロテスタントのアングロ・アイリッシュかカトリックか）が関わってくる。

B) 北部海岸地域とキラーニー（ケリー県）をめぐって

これらの地域は、18 世紀半ばから旅行者を引き付ける地域として認識され、世紀末までには観光地としての地位が確立していく。前者はジャイアンツ・コーズウェイを中心に奇岩が見られる地域であり、後者は山に囲まれた美しい湖の絶景で知られる土地である。定番の観光地は継続的に旅行記や旅行ガイドで取り上げられるが、それ故にこそ、旅行記では期待しすぎて失望する様子や、観光地化が進んだことによる問題点への指摘、また、その美観と裏腹に目の前に示されるアイルランドの貧困などが描かれていく。

小説では、イギリスの読者を意識して、このツーリズムに迎合するかのように観光地の描写が盛り込まれ、その小説自体が新たな旅行者を呼び込むという連関も認められるようになる（オーウェンソンの小説とプランプターの旅行記）。また、ツーリズムを意識しながら、その一定の型を批判的に活用することで、登場人物の旅の意義を明確化することにもつなげている。

C) コナハト（アイルランド北西部）をめぐって

この辺境へのアクセスがある程度容易になり始めたのは 1820 年代のことであり、産業が発展しにくいこの地域についての限界が認識されるとともに、その雄大な自然環境への賛辞が旅行記に示されている。この地域が特に注目を集めたのは、ジャガイモ飢饉による被害が大きかったことから、多くの大飢饉旅行者がこの地域に足を延ばしたことによる。飢饉後は、この広大な土地が有する豊富な資源（鉱物や泥炭）に言及し、この地域の発展の可能性を強く意識した言説が示されることとなる。

コネマラでの飢饉を描いたチャールズ・リーバーの小説、『マーティン家の人々』(*The Martins of Cro' Martin*, 1856) では、この地域での生活の厳しさが印象的に描かれている。そこでは、旅行記などでこの地域を象徴するかのように登場するキャビン（下層農民の住宅）が描かれ、挿絵とともに読者が期待するアイルランドのイメージを提供する役割を果たしている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　　件）

〔学会発表〕（計　3　件）

① Tetsuko Nakamura, 'The Post-Famine Representations of Connemara in Fiction and Non-Fiction', IASIL Japan, The 34th International Conference (Kindai University), 2017.

② Tetsuko Nakamura, 'Travelling around the South of Ireland: Representations of the Famine in Post-Famine Travel Books', The Famine and Social Class Conference (Queen's University Belfast, UK), 2017. (Organized by the International Network of Irish Famine Studies)

③ Tetsuko Nakamura, 'The Great Famine and Its Impacts: Visual and Material Culture' (Maynooth University, Ireland), 2016. (Organized by the International Network of Irish Famine Studies)

〔図書〕（計　1　件）

① 中村 哲子、彩流社、「アイルランドを巡る旅――プランプターの旅行記、そしてエッジワースとオーウェンソン」、『ジェイン・オースティン研究の今 同時代のテクストも視野に入れて』、日本オースティン協会編、2017、357-74.

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
中村　哲子（NAKAMURA, Tetsuko）
駒澤大学・総合教育研究部・教授
研究者番号：２０２３７４１５

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）